# 開学当初の国文学科

都築久義

愛知淑徳大学は昭和五〇年（一九七五）に開学しましたが、文学部国文学科と英文学科のみで、学生数も一学年が各学科一〇〇余名という小さな女子大学でした。国文学科の専任教員は八名いましたが、履修年次の関係などで開学当初の常勤の先生はわずか三人で、二年目から四人になりました。

ところが、第一期生を世に送った昭和五四年から五五年にかけて、国文学科の先生が二人も急逝され、二人の後任として若い先生を迎え、年齢層も若返り、常勤の先生も五人になりました。実は三五歳で赴任した私がそれまで一番若く、他はベテランの先生ばかりでした。大学院を出てまもない、新進気鋭の若い先生がこられて、国文学科の雰囲気も変わりました。

開学当初の国文学科のカリキュラムは極めてシンプルでした。古代、中世、近世、近代の時代別に講義と特殊講義をそれぞれ置き、他に国語学、漢文学、表現学、郷土文学、仏教文学などジャンルごとの特殊講義も開設していました。私が担当している郷土文学や国文学科開設の中心だった西田正好先生（故人）が始められた仏教文学は国文学科の専門科目として開設していた大学はほとんどないと思います。

演習（ゼミ）は科目としては最初から設置されていましたが、少人数の選択制ではなく必習のクラス単位の講義形式で

した。常勤の担当教員が少なく、現在のようなゼミは開けなかったからです。現在のようなゼミが開かれるようになったのは、大学院が開設され、常勤の教員も増えた平成元年頃からだったと思います。

ゼミのなかった頃は卒論指導に力を入れ分担して指導しました。しかし、一〇〇余名の学生を四、五名の教員に単純に割当てると一人二五、六名になってしまいます。そのうえ学生の希望は近代が圧倒的に多かったので、近代以外の専門の先生にも指導していただきました。ゼミがなかったので、卒論指導を通じて一人ひとりの学生と接することが多く、太宰治の卒論を書くために、学生たちと青森まで出かけたこともありました。卒論といえば当時、パソコンも普及していなかったので、全員が五〇枚以上の手書きの卒論を製本して提出し、大学に保存しておきました。さすがに五〇枚以上の手書き原稿を書き上げることは、学生にとっても手間のかかることでしたが、仕上げてみると達成感を感じ、学生時代の記念になったと言っていました。皆んな提出用の他に自分の記念にコピーを持っていたようです。

愛知淑徳学園は明治三八年（一九〇五）に創立し、県下最初の私立高等女学校を開校しましたが、戦後の学制改革で愛知淑徳中学校、愛知淑徳高校として再出発し、愛知淑徳短期大学を昭和三六年（一九六一）に開学しました。愛知淑徳大学の開学はそれから一四年後のことでしたから、大学の教育運営組織の多くは高校や短大の方法を踏襲しました。その典型がクラス制です。国文学科、英文学科ともそれぞれ名簿順に二クラスを作り、担任も置きました。さすがにクラス替えはなく、四年間同じクラスでしたが、授業はクラス単位で開かれ、時間割もクラス毎にありました。従って原則として同一科目は二コマありました。国文学科の専門科目が今も二コマ開かれているのが多いのは、この頃の名残という面もあります。クラスは国文学科がA・B、英文学科はE・Fの二クラスずつでした。

クラス制は授業だけでなく、創立記念日に行われていたスポーツ大会も、クラス対抗戦を行いました。バレーボールやテニスなどの試合をして、先生も学生も一緒になって応援をしました。

当時は携帯はありませんでしたが、今日のように個人情報が問題にされていなかったので国文学会会員名簿が全員に配

布され、住所も電話も誰もが知っていました。クラスの仲間同士電話をかけあったり、年賀状のやりとりをしていました。私も年賀状のやりとりが今も続いているのは、その頃の卒業生が多く、結婚式にもよく呼ばれました。

国文学会の研修旅行は、たしか開学二年目から始まったと思います。学科主任の今井文男先生の専門であった芭蕉のゆかりの地を訪ねるということで伊賀上野へ行きました。参加者は二、三〇名で電車で行きましたが、市内を徒歩で歩くのがつらくてネをあげてしまいました。今井先生ともう一人の近藤一一先生も六〇歳過ぎで、私と西田正好先生は三〇代、四〇代でしだが、若い私たちが先に参ってしまったことを今も思い出します。

国文学会といえば、機関誌の『愛知淑徳大学国語国文』は昭和五三年三月三一日に第一号が出ています。目次を見ると私ども四人の専任教員の他に、四人の学生が載せています。いずれも三年生で、「堀口大学『私の詩』――深さの機構」（松原春代）といった堂々たる論文です。現役の学生の論文は毎号載っていました。今井先生が指導しておられた短歌も毎号秀作が掲載されていました。

私は国文学科に開学とともに赴任し、平成七年（一九九五）に、副学長に就任してからは、文学部の教授会には出席しませんが、国文学科の会議には欠かずに出席するするようにしていました。国文学科の会議で、授業のことや学生のことを話している時が、一番ホッとする時間でした。開学以来の三五年の間に、大勢の先生を迎え、送りましたが、非実学的な「文学」という共通の絆があったので、楽しい時間を過ごすことができました。それは集り散じて行った学生諸君にもいえることです。国文学科の諸先生長い間お世話になりました。学生諸君も「文学」をいつまでも忘れずに。学生時代に知遇を得た尾崎士郎先生が「偉くならなくともよいが立派に生きよ」と言っています。学生の皆さんにもこの言葉を贈ります。